

岡山ハルビン会調査記

菅野智博

はじめに

本稿は「満洲の記憶」研究会が実施した、故立岡皓男氏（1924—2012 年）所蔵の岡山ハルビン会（既に解散）関連史資料の調査及び整理の成果である。岡山ハルビン会とは、岡山県に在住するハルビンからの引揚者によって結成された団体である。本稿では、まず調査の経緯について紹介した上で、岡山ハルビン会の活動を概観し、故立岡氏所蔵関連史資料の価値について検討する。なお、本号掲載の「故立岡皓男氏所蔵資料目録」及び『わが心のハルビン』記事目録も併せて参照されたい。

1 調査の経緯

まず本調査に至った経緯を簡単に述べよう。本研究会はこれまでに様々な史資料の収集や整理、保存作業を進めており、その中でも特に各帰国邦人団体が発行してきた会報や会誌の収集に力を注いできた⁽¹⁾。2013 年 7 月、本研究会の設立に先立って有志が国会図書館において関連史資料の調査を実施し、その際に岡山ハルビン会が発行していた会報『思い出と消息』（第 1—11 号、1977—1986 年）と

『わが心のハルビン』（第 12—20 号、1987—1995 年）を閲覧した。同会報には、大変豊富な内容が収録されており、毎号が冊子の形式で丁寧に製本されている。筆者は、会報に記載された情報をたよりに、岡山ハルビン会の中心的存在であった故立岡氏のご家族と連絡をとることができた⁽²⁾。そして、2013 年 12 月に故立岡氏のご息女である立岡洋子氏と、ご令孫の立岡海人氏を訪問し、関連史資料の所蔵状況に関する予備調査を行った。また 2014 年 12 月に再訪し、立岡洋子、立岡海人両氏の同意を得て史資料を借り受けた。

2 岡山ハルビン会の活動

次に岡山ハルビン会の活動について概述する⁽³⁾。同会の活動は 1974 年 10 月 10 日、岡山市内の蓮昌寺において開催された設立総会から始まった。設立当初の会員数は 30 名であったが、1977 年から解散直前の 1995 年までは常時 100 名以上（最盛期には約 170 名）の会員が所属していた。主な活動内容は、相互の消息確認や会報・体験記の出版、北方領土返還要求運動、ハルビン地域における遺骨収集・墓参などであった。

同会の活動の中でも特筆すべきものは、中国残留日本人に対する支援活動である。日中国交正常化以降に多くの帰国邦人団体が中国との交流を進め、それと同時に中国残留日本人への支援を開始した⁽⁴⁾。岡山ハルビン会は、1980年5月からほぼ毎年街頭募金を実施してきた。同会の記録によれば、1981年には約32万円、1982年には約31万円、1983年には約62万円を募ることができた⁽⁵⁾。集められた支援金は、一部が慰問金として活用されたほか、その多くは財団法人中国残留日本人孤児援護基金に寄付された。同会による残留日本人の支援は街頭募金にとどまらず、肉親捜しや訪中調査、身元引受け、来日孤児歓迎会など多様な活動を行ってきた。これらの活動は厚生省から表彰を受け、しばしば感謝状が授与された。



1983年2月岡山ハルビン会による中国
残留日本人救援募金活動
(故立岡皓男氏所蔵)

3 所蔵史資料の価値

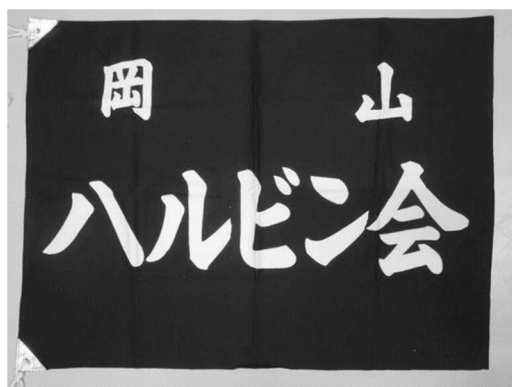
最後に故立岡氏の所蔵史資料の価値について検討してみたい。所蔵史資料は、大きく岡山ハルビン会に関連するものと故立岡氏自身のものの2種類に分けられる。ここでは、これらの史資料をさらにいくつかの種類に分類し、紹介すると共にその価値について述べる。

第1に、岡山ハルビン会をはじめとする各帰国邦人団体の会報である。岡山ハルビン会はもちろん、石頭会（関東歩兵石頭予備士官学校）、満洲電業会、ラーゲル・キリトマ会（ソ連抑留関連）など、故立岡氏が参加した各団体の会報や関連史資料が所蔵されている。また、各会から岡山ハルビン会に寄贈されたと推測される会報も多数含まれている。これらの会報の多くは、国会図書館にも所蔵されていない貴重なものである。

第2に、書籍や冊子、手稿などの回想録・体験記である。その中でも特に重要と考えられるのは、入手が困難な私家版回想録や未発表の手稿であろう。手稿にはおそらく会報に掲載される前の草稿や未掲載の原稿などが含まれていると考えられる。今後、会報と対照しながらさらに整理していく必要があるが、いずれにしても重要な資料であることには違いない⁽⁶⁾。

第3に、そのほかのアルバムや書簡、各会会員名簿、モノ資料などの史資料である。「岡山ハルビン会の歩み」と題したアルバムは数冊所蔵されており、その中

には同会がこれまで行ってきた募金活動や親睦会などの写真が収録されている。また、モノ資料としては山口淑子氏寄贈の色紙や、各会の会旗・法被、募金箱などが保存されている。これらの史資料は、同会の歩みやハルビン引揚者の戦後の活動を知る上で貴重なものであるといえよう。



岡山ハルビン会会旗（故立岡皓男氏所蔵）

（１）「満洲の記憶」研究会が収集した会報やその史料価値については、佐藤仁史、湯川真樹江、菅野智博「關於満洲遣返日人団体的会報及其史料価値」（『暨南史学』第17期、2014年）や、佐藤量、新谷千布美、菅野智博、飯倉江里衣「帰国邦人団体の会報からみる満洲記憶」（『信濃』第67編第11号、2015年）で論じた。

（２）故立岡氏が岡山ハルビン会の関連史資料を多数保管しているのは、故立岡氏経営の靴店が同会の事務局であったからである。

（３）岡山ハルビン会の活動については、『わが心のハルビン』（第20号、1995年）を参照した。

（４）例えば、大連会は1980年頃、数号にわたって同会の会報『大連会会報』に連絡先と離別時

結びにかえて

本研究会では、今後故立岡氏の所蔵史資料の整理・保存を進めると同時に、ほかの関連団体（東京ハルビン会、石頭会など）の史資料の収集も行う予定である。その上で故立岡氏個人のライフヒストリーや、彼が主宰した岡山ハルビン会の性質などについて分析していきたいと考える。

最後に、調査や史資料の整理にあたって様々な面にわたり懇切丁寧な応対を賜った立岡洋子氏と立岡海人氏に衷心の謝意を示したい。

の状況などが本人の写真と共に紹介されている。佐藤、湯川、菅野前掲「關於満洲遣返日人団体的会報及其史料価値」。

（５）1981年の募金期間は12日間、1982年の募金期間は19日間、1983年の募金期間は10日間であった。なお、1983年の募金額が多いのは、約40名のボーイスカウト（1日のみ）の協力を得たからである。「岡山ハルビン会年表」『わが心のハルビン』第20号、1995年。

（６）なお、手記や回想録を手がかりにハルビン引揚者の敗戦後の「満洲体験」を描いたものとして、上田貴子「哈爾濱の日本人——1945年8月—1946年9月」（山本有造編著『満洲——記憶と歴史』京都大学出版会、2007年）がある。